

離島における地域景観と地域社会の相関構造に関する研究

熊本大学大学院 学生会員 ○石見 佳苗

熊本大学 正会員 星野 裕司

熊本大学 正会員 増山 晃太

1. はじめに

1-1. 背景と目的

日本における地域景観は、戦後の高度経済成長期や産業構造の変化、急激な都市化などの様々な要因が複合し、日々変化し続けてきた。また、人口減少による地域の合併や行政サービスの集約が推進されることにより、古くから営まれる田園や里山などの農山漁村における地域景観の喪失が危ぶまれている。現状では国の主導のもと、「地方創生」が全国各地で進行しているが、各地域の自治体は進むべき道を模索し続けている。地域景観を保全するという観点から、各自治体や地域に存在する様々な組織がどのような社会的活動を行い、地域の景観構成要素を作り出しているのかを理解することは、地域景観を把握し、地域社会の進む方向性を期待することができると考えられる。

そこで本研究は、「主体」を「社会的活動を行う集合体、あるいは個人」、「場」を「主体が社会的活動を行う空間、景観構成要素」と定義づけた。このことより、自治的組織を持つ農山漁村地域を対象として、主体と場の相互関係を分析することを目的とする。

1-2. 研究対象と方法

本研究では、人口減少や高齢化などの社会問題が著しく、調査の対象範囲を限定しやすいことから、離島の長崎県佐世保市黒島町（以下、黒島）を対象とする。黒島は、面積 5.37km²、人口 412 人（2019 年 11 月現在）である。また、享和 3（1803）年～明治 11（1878）年の間、潜伏キリシタンと仏教徒の共存が実現し、現在はカトリック教徒が約 8 割在住している特徴を持ち、そのことにより、2018 年 7 月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界文化遺産に登録され、「黒島の集落」が構成資産の一つとなっている。

本研究では、文献調査、現地調査、各団体の代表へのヒアリング調査をもとに、主体と場について分析した結果をまとめる。

2. 場の調査・分析

2-1. 実態調査

まず現在の土地利用について現地調査を行い、景観

構成要素の抽出を行った。黒島は九州本土や平戸島からの移住による歴史的背景があり、8 つの集落に分かれている（図-1）。内訳は、カトリック教徒のみの集落が 6 つ（蔵、田代、名切、根谷、日数、東堂平）、仏教徒の集落が 1 つ（本村）、混在している集落が 1 つ（古里）である。各集落の景観構成要素として、家屋、里道、花壇などの個人や家族が管理する景観や、フェリーターミナル、公民館など行政や地域の自治組織が管理する景観、黒嶋神社や黒島天主堂など信仰共同体が管理する景観などが抽出された（写真-1）。

2-2. 景観構成要素の分析

各集落の景観の特徴を断面的に捉えようと、最初に移住者が来た本村の生活水が簡易水道であるのに対し、潜伏キリシタン時代に移住者が来た他の集落は井戸水であることが違いとして明らかになった。また、仏教徒の集落（本村）が日本の漁村にみられる石垣や家屋、

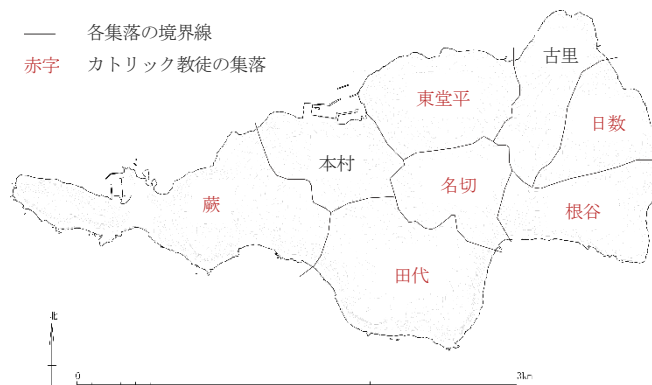


図-1 黒島の集落分布図（筆者作成）



写真-1 名切の黒島天主堂

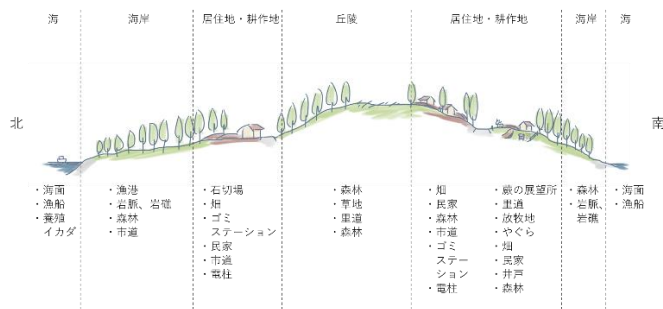


図-2 蕨の景観断面図

庭の造りであることにに対し、カトリック教徒の集落(蕨、田代、名切、根谷、日数、東堂平)が海岸から防風林、家屋、庭の順に繰り返される造りであることなども、違いの一つである。また、住民自ら手掛けた蕨の展望所や根谷の市道沿いの花壇整備など、各集落が独自の景観構成要素を持っていることが分析結果より明らかになった(図-2)。

3. 主体の調査・分析

3-1. 実態調査・相関構造分析

主体については、まず複数の団体にヒアリング調査を行うことにより、その相互関係の実態を明らかにした。黒島は、昭和29(1954)年に佐世保市と合併し、それ以降は佐世保市黒島町として黒島連合町内会が、平成29(2017)年からは黒島地区自治協議会と共に地域の自治の推進に取り組み、社会的活動を取りまとめている。黒島の経済面を支えているのは、漁協などの産業系の組織や、商店会などの商業系組織である。他にもデイサービスや小中学校といった組織も挙げられるが、これらの代表は黒島自治協議会に委員として所属しており、黒島で社会的活動を行う際は自治協議会にて審議、承諾されているといった特徴がある。

氏子や檀家、信徒らの宗教団体の社会的活動は、それぞれの信仰に従って行われ、活動に対する他の宗教団体の干渉は無い。しかし各個人が互いの信仰を許容しており、活動時にはその様子を伺う姿がみられる。また、小中学校の関与(黒嶋神社の秋季例大祭における、ダンスの発表³⁾)や黒島観光協会の委託販売(興禅寺の住職を中心とした黒島山本舗による、加工食品の販売)などの活動は、黒島全体における地域社会に独自性を与えている。

3-2. 主体と場の管理・活動・所有関係

2章で各集落に分けて抽出された様々な景観構成要素について、各団体の代表者へのヒアリング調査をもとに、管理・活動の主体、所有の主体、補助的制度に

表-1 田代の景観構成要素と管理・活動・所有関係
(藤倉ら²⁾の項目を活用)

景観構成要素(場)	居住地域・耕作地														
	田代	名切	根谷	日数	東堂平	黒島	黒島	黒島	黒島	黒島	黒島	黒島	黒島	黒島	黒島
社会構造要素(主体)															
個人・家族	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
近隣住民の集まり(祝祭)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
住民自治組織															
町内会(会務)															
連合町内会(町)															
自治協議会(地区)															
漁協															
観光協会															
氏子															
檀家															
信徒															
その他															
地域外所有者															
行政															
市															
県															
国															
個人・家族	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
所有	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地域外所有者															
行政															
市															
県															
国															

●: 景観構成要素に対する主要な管理・活動・所有の主体を示す
○: 景観構成要素に対する補助的な管理・活動、及び共同所有の主体を示す
□: 景観構成要素に対する補助金制度による関与を示す

よる関与などの関係性を、表に示した(表-1)。黒島は16世紀以前から放牧地として使用され、移住後の土地は水田や畑、宅地などに変換された¹⁾。そのため、個人・家族の所有地が多く残されていることが特徴として挙げられ、管理・活動の主体も個人・家族が多い。市道に関しては、各集落の町内会が管理の主体となり、清掃活動(木や草の伐採)を行う。また、森林や里道は個人・家族の所有がほとんどであるが、観光協会により清掃活動がおこなわれることがあり、また文化財として市や国からの補助的な関与もある。

4. おわりに

調査より、各集落に独自の景観構成要素が構成されていること、様々な主体が密に連携しあいながら、黒島全体の管理・活動を行っていることが明らかになった。今後は、文献調査による歴史的背景を踏まえながら、現地調査とヒアリング調査から得た内容について主体と場の相関構造分析を行う。それらの様々な相互関係から、黒島における地域景観の特徴について考察を行う。

【参考文献】

- 1) 佐世保市教育委員会: 佐世保市黒島の文化的景観保存調査報告書, 2011
- 2) 藤倉英世, 山田圭二郎, 羽貝正美: 地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成・発言に関する実証的研究, 土木学会論文集 D, Vol.66 No.3, pp394-413, 2010.9
- 3) 黒島小中学校校長 惣田正宏: 学校だより「ふるさと黒島!」, 義務教育学校 黒島小中学校(黒島はまゆう学園), 27号, 2019.10.25, http://www.city.sasebo.ed.jp/es-kuroshima/common/getDispBinFile.asp?t=T_KIJI&n=shiryou1&s=4&k=76428 (最終閲覧 2019.12.19)